【論文】

イーダ・ハーン＝ハーンと『伯爵夫人ファウスティーネ』
―1848年ドイツ三月革命前の時代に活躍した女性作家―

松　永　知　子

Ida Hahn-Hahn und *Gräfin Faustine*
― Eine deutsche Schriftstellerin im Vormärz ―

MATSUNAGA, Tomoko

要旨：1848年ドイツ三月革命前の時期には注目すべき女性作家が、何人か世に出ている。人間の自由と平等を求めたフランス革命の人権宣言が、女性を度外視していることに反発して、女性にも同等の権利をと女性たちが声を上げ始めた時期である。この時代の女性作家の一人、イーダ・ハーン＝ハーンと彼女の代表作『伯爵夫人ファウスティーネ』を取り上げ、彼女が目指した女性解放を、この時代の全体像から位置づけることを試みる。
キーワード：イーダ・ハーン＝ハーン，女性作家，伯爵夫人ファウスティーネ，ドイツ三月革命前，女性解放

序章

イーダ・ハーン＝ハーンの経歴を『ドイツ作家事典』[1] で調べると次のように書かれている。彼女は1805年6月22日トレッソウ（Tressow/Mecklenburg）に生まれ、1880年1月12日マインツで亡くなる。父はKarl Friedrich von Hahn-Neuhaus伯爵。1826年いとこのAdolf von Hahn-Basedow伯爵と結婚するが、1829年に離婚する。その後は、ベルリン、ウィーン、

ドレスデンと移り住み、その間スイス、オーストリア、イタリア、スペイン、フランス、スウェーデン、シリア、パレスティナへと数多く旅行する。1838年青年ドイツ派の影響のもとで、貴族階級の社交界小説で小説家としてデビューする。女性解放の先駆者として影響を与えたが、1850年カトリックへ改宗。改宗後の小説は質的に明らかに劣る。

さて、イーダ・ハーン＝ハーンを始めとしてこの時代の女性作家は、一旦は文学史から消え去っていたが、1970年代になって再び脚光を浴びた。何が起こったかというと、第二波フェミニズム運動の嵐だった。このフェミニズム運動の中で、長年図書館の片隅で眠っていた過去の女性作家たちの作品が発掘され、研究が始まった。このとき幸いなことに、ハーン＝ハーンの代表作『伯爵夫人ファウスティーネ』が復刻され、1986年に再び世に出たのである。

私の以下の拙論では、この作品を手がかりにして、彼女の時代の女性の平等の権利を求める動きと、それとは一線を画する彼女の主張する「女性解放」の特色を解明したい。

第1章　19世紀前半の時代背景

1　政治状況

ハーン＝ハーンの生まれた時代を概観しておきたい。19世紀前半のドイツは激動の時代だった。隣国フランスでは、1789年の革命後、ナポレオンが台頭し、1804年にフランス皇帝の位についた。ナポレオンは、直ちに対外侵略を開始してヨーロッパ全体を動乱の渦に巻き込んだ。ドイツはこのとき、ナポレオンに屈服し、政治地図を大きく塗り替えられた。1806年8月6日「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」は、オーストリア皇帝フランツⅡ世の退位により消滅する。勢いに乗ったナポレオンは、1812年ロシア遠征を企てるが、失敗する。弱体化したナポレオンに対抗して対仏同盟軍が結成され、結局ナポレオンは破れエルバ島に流されたことは、誰もが知る歴

史の一齣であろう。こうして、ナポレオンの栄光は終りを告げ、ヨーロッパはナポレオンから解放された。しかしナポレオンの支配がドイツに意味したことは、ナポレオンという外からの圧力によってであったが、ドイツは中世の眠りから起こされ、遅ればせながら国民主義に目覚めるきっかけを与えられたのである。

ナポレオンによって完全に破壊されたヨーロッパの戦後処理のために、1814年ウィーンで会議が開催され、戦後の国際秩序の再建が論じられた。このとき、全ヨーロッパの代表が招かれたが、「会議は踊る、されど進まず」といわれたように、会議は各国の利害の調整に追われ、一向に進まなかった。会議は、オーストリアの外相メッテルニヒの司会で、大国の勢力均衡の立場で進められた。その結果、旧態依然たる王政復古の体制が復活し、保守反動の色合いの濃い政治体制を成立させ終結した。しかし、時代の流れに逆らったこのウィーン体制は、やがて成長しつつある自由主義や国民主義に勝てず、1848年の革命によって崩壊することになる。

次に、ウィーン体制によって新しくなったドイツの政治地図の変化を見てみよう。1815年6月ドイツは「ドイツ連邦」となった。神聖ローマ帝国は300にのぼる領邦国家で形成されていたが、「ドイツ連邦」は39の邦国へと縮小されただけであった。その内訳は35諸侯国と4自由市からなるゆるやかな連盟で、統一国家とは相変わらず程遠いものであった。諸邦国は主権を保持したままで独立が保障されており、連邦の統一機関としてはフランクフルトに連邦議会があるに過ぎなかった。だが、39邦国のうちの大国オーストリア帝国とプロイセン王国、この2君主国家がやがて19世紀後半には統一ドイツ国家への覇権を争い、歴史の表舞台に登場することになるのである。

さて、ハーン＝ハーンは、この39邦国の一つのメクレンブルク大公国に生まれた。メクレンブルクは、現在はメクレンブルク・フォアポンメルン州となっており、バルト海に面している。今でも中央から遠く離れた北の地であるが、当時はなおさらのことで辺境の地といわれていた。

2　社会状況

19世紀前半の時代を社会的状況からみると、一言でいうなら身分制社会から市民制社会への大転換期であったといえる。ナポレオン支配下の時代に、ドイツのどの邦国でも上からの近代化改革が行われ、農民解放の政策は大規模に推し進められていた。その結果、隷属農民から自由な独立農民が生まれて来つつあった。一方、都市においても、従来の同業組合が持っていたツンフト（ギルド）規制と営業の特権が段階的に廃止され、誰もが自由に手工業を営むことができるようになりつつあった。とはいえ、この時代のドイツはまだ圧倒的に農業国で、人口の9割以上が村落に住んでいた。しかし、以上のように、農民解放と営業の自由が進められつつあったことから、イギリスやフランスに遅れてであるが、ドイツでも産業革命に突入していた。工業化へのインフラとして、1835年にまずバイエルンのニュールンベルク―フュルト間に最初の鉄道が建設されるや、更なる鉄道の延長が急ピッチに進み、19世紀の半ばにはドイツの重要な都市間は鉄道によって縦横に結ばれ、鉄道網の骨格は出来上がっていた。

ところで、当時のヨーロッパにおいて、どうしても工業化を進展させざるを得なかった社会的要因が別にもあった。それは人口の急増である。18世紀後半から人口は増加する一方で、人口の急増が社会的変化を促進させていく大きな要因になった。人口増加は都市と農村における下層民の増加を意味した。人口増加による貧困層の増加に対処するためには究極的には、経済の発展、つまり工業化の進展に依るしかなかったといえる。

さて、この時代の社会は大きく分けるなら、3つの階層に分けられる。

第1番目は貴族。この時代には貴族の法的特権はすでに失われ、市民社会的秩序に編入されていたが、貴族の政治的・社会的地位はなお強固なものがあった。市民層の中には貴族の地位と威信への憧憬を強く持つものもいた。他方では貴族の特権や政治的優位に反発し、自己の政治的・経済的進出を図っていくものもいた。この時期は旧身分制的要素もまだ根強く残っていて、新旧両社会の移行期でもあった。

2番目は市民階層。市民階層は、さらに三つの集団に分類することができる。第一は、学問・行政・法律・教育制度のエリートたる教養市民層、第二は、商人や工業企業家や銀行家などの経済市民層、そして第三は、小商人や手工業者などの小市民層である。

3番目は社会下層で、都市の工場労働者や手工業雇い職人や徒弟や日雇い、農村では、小農や農業奉公人や農村工業従事者などがここに入る。19世紀始めには、そもそも労働者階級はまだ存在しなかった[2)]。貧困と困窮にあえぐ下層民は、さまざまな形で社会的抗議を行なったり、あるいは、食糧暴動を起こすにまで至った。低賃金や長時間労働等劣悪な条件で働くこの下層民の貧困化が、やがて大きな「社会問題」となって、1848年三月革命を引き起こす要因の一つとなっていく。

市民制社会は建前としては、諸階層間で下から上へと開かれている社会のはずであるが、現実的には下の階層の者はなかなか教育と訓練が受けられないために、上昇への道が閉ざされていく傾向にあった。こうして、労働者階層が固定化され再生産されていくことになった。ところで、身分制社会が終焉し、新しい時代へと移行しつつあるこの時期、1815年から48年の間をドイツ史では「三月前期」（Vormärz）と言っている[3)]。

一方、「三月前期」は、政治的側面から見ると立憲自由主義が浸透していった時期でもある。40年代のドイツではいたるところ不穏な状況にあり、社会的緊張に満ちていた。言論と集会に対する弾圧と警察の検閲への反発が拡大し、国家介入に反対する抗議行動があちこちで頻発した。経済と文化の面から指導的な勢力に成長した市民階層は、政治参加の権利、出版・集会の自由、議会の開催等の諸要求を君主たちに提出したが、君主たちはかたくなに拒否していた。他方、都市の手工業職人や労働者も政治化し、独自の考えを発展させていった。しかし、改革は一向に進まず、市民たちの不満が鬱積していた。そのような状況下で、1848年フランスで二月革命が勃発したという知らせが届くやいなや、ドイツ諸国でも大規模な市民集会が開かれ、市民はそれぞれの君主に請願書を突きつけた。こうして一ヵ

月遅れで三月革命の嵐がドイツ各地で吹き荒れたのである。

3　女性の社会状況

この時代の女性の地位はというと、1794年に制定されたプロイセンの「一般ラント法」が今なお有効性を保っていた。夫婦間では、夫が「長」として「共通の事項に対する決定権を有する」規定（195条）、さらに「婚姻が取り結ばれると妻の財産は、法律や契約によってその管理が妻に保留されていない限り、夫の管理下におかれる」規定（205条）など家父長的な規定が織り込まれており、家族はいまだに家という伝統的な共同体の性格を残していた[4]。しかし、家長の絶対的な権威の中にあっても、女性の人権に関する意識は、フランス革命の影響でドイツにも生まれていた。

女性の人権をはじめて主張したのは、フランス女性オランプ・ド・グージュ（Olympe de Gouges 1748 ～ 1793）である。彼女は人間の自由と平等を高らかにうたったかの有名なフランス革命の「人権宣言」に対抗して、1791年『女性と女性市民の権利宣言』（*Déclaration des droit de la femme et de la citoyenne*）を発表した。「人権宣言」は、男性市民の権利を宣言したもので女性は度外視されていたのを見て、女性も男性と同等の権利を持つべきだと主張したのである。ドイツではケーニヒスベルクの法律家であり作家、またカント（Immanuel Kant 1724 ～ 1804）の友人でもあるテオドール・フォン・ヒッペル（Theodor Gottlieb von Hippel 1741 ～ 1796）が1792年に『女性の市民的改善について』（*Über die bürgerliche Verbesserung der Weiber*）を著した。彼は啓蒙的な法律家の立場から、男性が自分に要求する人権や市民権は、女性にも保障されるべきだと熱心に主張した[5]。

さて、女性の状況も先に分類した三つの階層によって異なっており、それぞれの階層はそれぞれ異なった問題を抱えていた。第1番目の貴族の女性の場合は比較的自由に行動できた。一方、3番目の階層に属する農家や手工業の家族の女性や労働者階層の女性にとって、家族というのは経済的に生活を維持していくための労働共同体にほかならず、彼女たちは共に働

いていたか、働かざるを得ない状況にあった。

それに比して、中間の2番目の市民階層の家族の女性の場合は、経済的にある程度の余裕はあるが不自由な状況にあった。この階層では、夫が外で働き、妻が家事をするという性別役割分担が一般的になり始めて、性別役割分担・職住分離を特徴とする「近代家族」の形態が定着しつつあった。しかし、妻の財産は夫の管理下にあったうえに、妻の就業も夫の同意が必要とされたので、この階層の女性の生活空間は、3K「台所（Küche）・子供（Kinder）・教会（Kirche）」ともっぱら家庭だけに役割が狭められていた。

ところで、「男は外、女は家」という社会的規範が強まっていく中で、この規範を揺るがしかねない社会的矛盾が露になってきた。それは両性の数の不均衡だった。男性の数は、戦争等の原因で常に女性の数より少なく、その結果結婚できない女性が多数出てきたのである。未婚の女性の運命について、イギリスのメアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft 1759 ～ 1797）は、彼女の著書『女性の権利の擁護』（*A Vindication of the Rights of Woman* 1792）の中で、次のように言っている。彼女たちは両親の保護の下にいる間はよいが、両親が亡くなると、家長になった兄弟に依存した生活になり、惨めな生活が待ち受けている。しかも、家の中では家長の妻が実権を握っているので、物乞いをしながら生きるという屈辱感を一層強く味わうことになると言い、女子教育の必要性を主張した。ついでながら、『フランケンシュタイン』（*Frankenstein* 1818）の作者メアリ・シェリー（Mary Shelley 1797 ～ 1851）は彼女の娘である。やがて、こうした未婚の女性たちの間で、経済的自立の必要性が現実的な問題として捉えられ、就業の要求とその前提となる職業教育を求める運動が生まれてくるのである。しかしこの運動が本格的に展開するのは、ドイツではまだ数十年先のことである。1865年になってようやく、ルイーゼ・オットー＝ペータース（Luise Otto-Peters 1819 ～ 1895）を中心にして、女性だけの会員から成る「全ドイツ女性協会」（Allgemeiner Deutscher Frauenverein）が結成された。女性たちはここに力を結集して、女性の教育権と労働権を要求し始

めていく。第一波フェミニズム運動の始まりである。

この時代、最もよく読まれた女性作家として、イーダ・ハーン＝ハーンとファニー・レーヴァルト（Fanny Leward 1811 ～ 1889）がいる。レーヴァルトの方が、ハーン＝ハーンより6才若いが、ほぼ同年代であり、自他ともに認めるライバルだった。しかし、生い立ちといい、小説の作風といい全く異なり対照的である。ハーン＝ハーンは貴族階級、レーヴァルトは市民階層と、先ず階層が異なる。レーヴァルトの家族は、当時の市民層の家族の典型であり、その典型例として『ドイツ女性の社会史』の中にもよく出てくる。レーヴァルト自身が、自伝の中で自分の生い立ちを詳しく書いていることで、この時代の女性の社会史の好材料として貢献しているのである。彼女は、ケーニヒスベルクのユダヤ人の商人の娘で、8人兄弟の長女に生まれた。町で最も声望のある家族が娘を送る私立学校に6才から13才まで通ったが、その上の学校（ギムナジウム）や職業に就くための教育機関はまだ女子に門戸を閉ざしていたので、彼女の受けた教育はここで止まった。勉強好きだった彼女は、上の学校に通う弟たちを羨ましく思った。一方自分はというと、下の子供の御守りや繕い物等の母の手伝い、いわゆる将来の主婦業の準備で毎日を過ごしていた。夕方になると、「一日中まともなことは何もしなかったという打ちのめされた感情に沈み、今日も一日無為に送った」と書いている[6)]。

当時は、何かまともなことをし、責任を負い決定する、このことを女性は結婚したときに初めて成しえた。それ故、少女時代はひたすら未来への婚姻と自分の世帯への待機期間と考えられていた。遅くならないうちによい縁組をと、確実な収入とそれ相応の社会的地位にある男性が、両親により選ばれるのはふつうのことだった。しかし、ファニー・レーヴァルトの希望は、当時女子にも開かれていた道、女子師範学校へ通って教師になることだった。だが、両親に打ち明けるような状況ではなかった。彼女が25才のとき、両親はしかるべき財産と地位のある男性を花婿として選んだが、彼女の意に染まない男性だったので拒否した。父は泣いて頼んだというが、

彼女は自分の意志を通した。このとき、彼女は自分を売れ残りの商品のように思い、心理的危機状態に陥ったと書いている。やがて、文筆業で自活の道が開け、父から独立したときには34才になっていた。後年、彼女は「全ドイツ女性協会」に参加し、市民層の女性の「女性解放」のために闘った。

第2章　イーダ・ハーン＝ハーン

イーダ・ハーン＝ハーンは自分の生い立ちを書き残さなかったので、彼女の履歴については多くをレナーテ・メーアマン（Renate Möhrmann）の研究書[7]に拠っていることをお断りしておきたい。この著書は「三月前期」の女性作家、イーダ・ハーン＝ハーン、ファニー・レーヴァルトのほかルイーゼ・ミュールバッハ（Luise Mühlbach 1814 ～ 1873）とルイーゼ・アストン（Louise Aston 1814 ～ 1871）も取り上げ、それぞれの立場で繰り広げられた「女性解放」について詳述している。

イーダ・ハーン＝ハーンが生まれ育ったメクレンブルクは、政治的にも社会的にも他の諸邦に比して遅れていた。地主貴族による農奴制に基づく農場領主制がいまだ維持されており、舗装道路も工場もなく、進歩の思想から閉ざされた中世の世界そのままだった。ドイツは1871年プロイセン主導で統一したが、そのドイツ帝国（～ 1918）の宰相ビスマルク（Otto von Bismarck 1815 ～ 1898）をして、メクレンブルクでは歴史が100年遅れてやってくると言わしめたほどだった。

さて、彼女の父は「芝居伯爵」と異名をとったほどの芝居好きで、風変わりな人物だったようである。自分の領地に芝居小屋を作り、旅回りの役者たちを呼び寄せ、館に泊め歓待していた。この芝居への熱狂が、やがて家庭崩壊と経済的破綻を招き、両親は離婚する。両親の離婚後、彼女は母とともに暮らすが、父について語ることは一切なかった。父は伝統的な地主貴族の暮らしに満足できず、因襲的な階級制度社会のいわば異端児だったといえるのかも知れない。そしてこのことがもしかしたら、娘に新しい

生活の可能性を予感させる何らかのシグナルを与えていたのかも知れない。それとも、後年の彼女の奔放さは遺伝子の中に疾っくに組み込まれていたのだろうか。

ところで、彼女の受けた教育はというと、貴族の子女に通常与えられるようなものにしか過ぎなかった。貴族の娘にとってはいずれ社交界での生活が中心になるので、社交界で恥をかかないような教育として、例えばフランス語は必須科目だった。21才になったとき、裕福ないとこのアドルフ・フォン・ハーンを親戚から紹介され、彼女は彼の求婚を素直に受諾した。この時代の貴族階級の娘の結婚相手として、よき一族の中から家族の繁栄が期待できる者が選ばれることは一般的によくあったことである。娘にとっては、家族の期待に応えることが自分の義務と感じていたので、嫌悪感を抱く相手でなければ従順に従ったのである。また、順応するように子供の頃からしつけられてもいた。彼女もそうした一族の思惑に逆らうような娘でなかった。普通の女の子のように、結婚にばら色の未来を夢見ていたであろう。

しかし、すぐに現実を知らされた。彼女の夫の最大の関心事は、馬であった。馬の飼育、調教、野外乗馬レース、それに狩に熱心だった。彼女は、それらのどれにも関心を持てなかった。しかし、「妻というものは夫に従わなければいけない」と田舎貴族の妻であろうと努め、夫の要望にできる限り従った。この当時の彼女はまだ自己意識をはっきり持っていなかった。しかしその後、馬の絵を描く画家との文通が夫に知られ、離婚が言い渡された。その手紙の内容というのは定かでなく、捏造されたものともいわれているが、しかしいずれにせよ、他の男と何らかの付き合いがあったことは、夫の威信にかかわる問題であった。こうして、結婚4年目の24才のとき、彼女は1500ターラーの年金をもらう契約で離婚を承諾し、メクレンブルクの土地を離れた。

さて、彼女が著作によって世に登場したのは、離婚後6年たってからだった。その間の彼女の生活はというと、小説で明らかにされるであろう。ク

アラントの男爵アドルフ・フォン・ビュストラム（Adolf von Bystram）と知り合い恋愛関係に入り、二人でヨーロッパの各地を回る旅をしたりして共に暮らしていた。当時は旅行が流行し始めた最初の時代だった。彼女は旅を好み、旅によって見聞を広め、絵画や建築物についての知識を得て、彼女に欠けていた教養の多くを旅から補った。1843年から44年にかけては、中東からアフリカ大陸へまで足を伸ばしたほどだった。女性が旅をするには、まだまだ多くのやっかいな障害を乗り越えなければならない土地柄であったことは、想像に難くないが、彼女は興味を持って敢然とやってのけた。アフリカでは、テントを持ち、らくだの背に一日8時間から10時間も揺られ、ダマスカスから砂漠を越えた。あるときは、ベドウィンのテントの中に泊めてもらったりもした。それまで見たこともなかった人間や風俗や風景に出会い、彼女の好奇心は尽きることがなかった。そして、異なる世界を知ったとき、それまで彼女を縛っていた社会規範は相対的なものであると悟った。社交界の人たちは、ビュストラムとの結婚しない関係について憤激していたが、彼女はもう気にしなかった。彼女にとって何よりも大切なことは、ビュストラムとの自由意志での共同生活、旅、そして書くことで、それだけを考えた。

1835年ビュストラムの勧めで最初の詩集を出して以来、1850年カトリック改宗までの15年間に、5冊の詩集と6冊の旅行記、それに10冊の小説を書いた。最初の小説は1838年『社交界から』（*Aus der Gesellschaft*）、2作目は39年『ふさわしい男』（*Der Rechte*）、3作目が41年『伯爵夫人ファウスティーネ』であり、これが代表作となる。

彼女の小説の世界は、彼女の個人的な体験から生まれている。結婚と離婚の体験、結婚の間の差別的体験から再婚への拒否、そしてパートナーとの対等な関係等が主な題材となる。彼女の私生活における行動も大胆だが、それ以上に大胆だったのは、慎ましくあることが女性の理想像とされた時代に、女性が自分の内面をあからさまに曝け出し、書いたことだった。それは、この時代では社会的タブーだったからである。それ故、彼女の小説

は何よりも先ず好奇の目で読まれ、女性のみならず男性の読者をも惹きつけることになった。

当時の小説の読者層というのは多くは市民階層の女性だった。職住分離、役割分担が定着しつつあった市民層の家庭の女性たちには、生活に余裕が生まれていた。しかし、外での活動は制限されているので、家の中でできる気晴らしといえば、小説を読むことだった。この層が、ビーダーマイアー（Biedermeier）といわれる小市民的文化を生み出していくのでもある。小説は、このような読者に応えて書かれはじめたので、書き手も初期は、ほとんどは女性だったようである。しかし、女性が職業を持つことは戒められていた時代なので、多くは匿名で書かれたか、あるいは男性名のペンネームで書かれたので、名前が残っているのは数少ない。小説というジャンルそのものの歴史がまだ浅く、それ故まだ未成熟で、未発達な段階だった。

近代小説の歴史を紐解くなら、イギリスのサミュエル・リチャードソン（Samuel Richardson 1689 ～ 1761）によって1740年に書かれた書簡体小説『パミラ』（*Pamela; or Virtue Rewarded*）で始まったことは、よく知られている。この小説が爆発的な人気を呼び、その影響がドイツにまで及び、ドイツの女性作家第一号といわれるゾフィー・フォン・ラロッシュ（Sophie von La Roche 1731 ～ 1807）を誕生させた。ついでながら、ロマン派の作家クレメンス・ブレンターノ（Clemens Brentano 1778 ～ 1842）とその妹ベッティーナ・フォン・アルニム（Bettina von Arnim 1785 ～ 1859）は彼女の孫たちである。この当時、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749 ～ 1832）の主要な作品が戯曲であったように、男性作家はまだ伝統的な戯曲形式に固執していた。しかし、ゲーテが『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers* 1774年）で、当時流行のイギリス風の小説形式を選んだことが、全ヨーロッパで読まれるほどの人気を博した理由の一つだと思われる。小説形式のほうが、人間の心理をはるかに木目細かく表現できるからである。1830年代になると、ロマン主義とはっきり対立して、文学の政治参加をモットーに掲げる文学運動の若い作家たち、青年ドイツ

派（若いドイツ、Junges Deutschland）が登場する。この派の一人ハイネ（Heinrich Heine 1797 ～ 1856）は、詩を多く書いているが、他の作家は彼らの主張を散文で著し、ジャーナリズムの祖となった。やがて、散文や小説を書いてお金が得られることがわかると、才能のある男性作家たちがこのジャンルに本格的に参入し、不利な条件を負っている女性作家は隅に追いやられていくのである。

ハーン＝ハーンの小説は、他の作家や批評家から、批判の十字砲火を浴びた。女性解放中毒患者、男を食うアマゾン族の女、あるいは腐敗の燐光を放つとか、またファニー・レーヴァルトからはディオゲネスの子孫と揶揄された[8)]。なお、ディオゲネス（Diogenes B.C.412頃～ B.C.324頃）とは酒樽に住むなど伝統や常識にとらわれない生き方をしたギリシアの哲学者である。彼女の小説は出るたびに、そういう類の書評で雑誌をにぎわし、その数は、あのハイネに勝るとも劣らなかったというが、それだけ同時代人にはよく読まれたということである。『伯爵夫人ファウスティーネ』は3版も版を重ねたほどだった。そのうえ、彼女の小説が上流階級の生活を垣間見させてくれたことも、読者にとって魅力だったようだ。ところで、彼女は同時代のフランスの作家ジョルジュ・サンド（George Sand 1804 ～ 1876）からも多くの影響を受けており、ドイツのジョルジュ・サンドといわれている。

彼女の小説の女主人公は、自己意識を持ち、自分の価値観から慣習的モラルを攻撃し、男女の対等な関係を主張する。しかし、それができるのも、何といっても彼女が社会的に認められている名前と富をもつ、貴族という特権階級に属している者だからであることは、見落としてはならないであろう。このことに関しては、貴族女性の趣味の域で書いている素人に過ぎないという批判もある。貴族女性の場合、未婚のままでも離婚しても、一定の額の年金がもらえたので、彼女が経済的な理由で書いているのでないことは確かである。男女の役割分担に関しても、貴族階級の男性の職業はといえば無職なわけだし、女性も家事は使用人に任せているので、一般的

に、この階級の者たちには家庭内での役割分担意識は希薄であろう。だから、市民階層の女性が抱くような、経済的に夫に依存していることに起因する不満も、貴族女性には少ないと言えるだろう。それ故ハーン＝ハーンが求めている平等というのは、心情的かつ知的な面での男女の平等問題に集中する[9]。この点で、彼女の主張する女性解放は、経済的に余裕のある女性の考える、いわば貴族女性の解放という特殊性があり、限界があるのも確かである。しかし、この問題を考えるとき、すでに述べたように、この時代の階層によって異なる女性の状況を考慮しなければならない。

何はともあれ、彼女の創作欲には激しいものがある。「私は、自己満足のために、そしてより完全なものを求める私の魂の渇きから書いた。そして、他の人々の中にある同じ渇きを刺激するために書いた。」また、「深夜、机から立ち上がってベッドへ行くとき、疲れて寝ぼけながらも、明日も書き続けることのできる喜びのあまり、わっと歓声をあげることがあった」[10]と書いている。

彼女は、そもそも詩や小説を書くという表現することに最大の関心があり、その上で書きたいテーマが、常日頃から不満に思っている男女不平等の問題というわけである。それ故、彼女の女性解放の要求は、極めて個人的な関心事から出発していて、社会的な女性の権利の拡大要求とは明らかに別物である。彼女には、社会改革の構想や目標といったものはない。ただ、女性に対する男性の権威主義や女性への抑圧が許せないのである。この彼女の視点が、女性に不平等な社会制度を鋭く告発させるのでもある。「女子を大学へ通わせてごらんなさい。そして、男子を裁縫学校と台所へ行かせてごらんなさい。そうすれば、三世代後には抑圧とは何かがわかるでしょう」[11]と小説の中で言っているが、自己規制をかけずに、ずばりと本質を突く発言をするのが、彼女の身上である。

男性と女性の違いは、生まれながらにあるのではなく、環境と教育によると言ったのは、20世紀のフランスの女性作家シモーヌ・ド・ボーヴォアール（Simone de Beauvoir 1908 ～ 1986）だが、ハーン＝ハーンも同じよ

うに考えていたのは興味深い。ただ、彼女の場合は理論が先にあるのでなく、体験に基づく彼女の自由な感性が言わせているのであって、それは彼女の限界であるが、強みでもある。

第3章　『伯爵夫人ファウスティーネ』

1　小説のあらすじ

小説『伯爵夫人ファウスティーネ』[12] の冒頭の場面は、ドレスデンのエルベ川沿いのブリュールのテラス、ここに数人の男たちが座って、道行く人々を見ながら、四方山話にふけっている。彼らのほかにここにいるのは、一人の女性だけであり、その女性はスケッチに熱中している。この女性が小説の主人公ファウスティーネである。やがて、男たちのところへ二人の男性が加わる。その二人というのは、フェルデルンと彼の大学の同期生マリオ・メンゲンである。フェルデルンは、彼らにマリオを紹介する。マリオは外交官として、この地にはじめて赴任してきたところであった。ファウスティーネは、やがて男たちに挨拶をして立ち去る。その後、男たちは彼女の話題でひとしきり花を咲かせる。彼女がアンドラウ男爵と良い仲であることを知らない人はいない。二人の結婚には何ら障害はないのに、何故結婚しないのだろうかと言い合っている。彼女についての噂話を、マリオは興味深げに聞いていた。このマリオ・メンゲンが、やがて彼女に恋する人物である。小説の本筋は、アンドラウとマリオ・メンゲンの間でファウスティーネの心が揺れ動くというように展開していく。

アンドラウとは、一体どのような男性なのか。アンドラウは、彼女の恋人であるが、同時に、彼女にとって友であり、師であり、父でもあるというようにすべてを兼ね備えた人物だった。性格はというと、二人は正反対だった。彼女の性格は、空想的でかつ活動的、一方、彼の方は明晰で、冷静沈着な性格といった具合である。彼女は、気分の赴くまま、情熱に駆られて行動に走る。自分の欲するところに従い、他人の評価を気にしない。

そういう彼女を、彼は補ってくれた。彼の意見がもっともだと思ったなら、彼女は素直に従った。

本筋に先立って小説の次の展開として、ファウスティーネと妹のアデーレとの対照的な生き方が描写される。ファウスティーネは、妹の息子の洗礼に立ち会い名付け親になるために、妹の婚家のある田舎に向かう。二人の姉妹は、幼い時に両親を失い、学校で寄宿生活を送った後、叔母のもとに引き取られた。叔母は、二人の早いうちでの結婚を望み、二人に適当な男性を引き合わせた。二人も窮屈な叔母の家を早く出たいがために、それぞれ結婚して家を出た。

妹アデーレは、農場主のヴァルドルフと結婚した。彼は仕事に生きがいを持つ男性であるが、アデーレも主婦の生活に生きがいを持つ伝統的な女性のタイプとして描かれる。彼女は働き者で、畑で自らの手で育てた亜麻を紡ぎ、織り上げたりもした。夫は、彼女が子供を生むたびに、褒美として土地を彼女に分け与えた。彼女が男の子を生んだときには、二倍の土地を与えた。彼女はこうして得た土地に、種をまいて、そこから生み出される収入を、娘たちへの持参金として蓄えているしっかりものだった。彼女は、すっかり農家の主婦になりきっていた。アデーレは、家族のために生きる生活にしか興味がなかったが、ファウスティーネには、それは大きな自己犠牲としか思えなかった。

アデーレの夫ヴァルドルフの考えも、男は支配し、女は従うように生まれついているのだと、家父長制の家長そのものの考えの持ち主である。そのような彼の考えに、ファウスティーネは真っ向から反論する。「あなた方がちょっと合図をするだけで、私たちは来る。あなた方が何かを言えば、私たちは賛嘆する。あなた方が微笑むなら、私たちは跪く。あなた方が怒るなら、私たちは絶望的になる。あなた方は、そうするようにといつも命令しているのです。でも、それは私たちを冷酷にするだけでしょう。」[13] と。

田舎での滞在は、ファウスティーネにとって、退屈そのものだった。ただ唯一救われたのは、ヴァルドルフのはるか年下の弟のクレメンスが、彼

女の散歩相手をしてくれたことだった。彼は彼女を崇拝していたので、彼女の男女平等論に熱心に耳を傾け、感化されていた。

次の小説の展開は、最初の場面で登場した大学の同期生同士である両者、フェルデルンとマリオ・メンゲンへと移る。この二人の男性も対照的な性格として描かれる。フェルデルンは職業軍人である。誠実で、几帳面な性格なので、味気ない仕事でも不満を言わず，黙々とこなしていく。少し面白みに欠ける人物といえよう。一方、マリオは外交官。野心家で、独立心に満ちていて、持てる力すべてを出し切って、より豊かで華麗な世界を目指す男である。いわば、上昇志向の強いタイプといえよう。二人は女性観でも異なる。

フェルデルンには、4年間交際しているクニグンデという婚約者がいる。彼らが結婚に踏み切れない理由は、クニグンデの方に結婚の意志が固まっていないからである。フェルデルンの待ち続ける態度を、マリオは理解できない。マリオは、クニグンデを紹介されたとき、彼女は美しいが、どこか冷ややかな女性という印象をもった。彼女はフェルデルンを尊敬しているが、今は誰とも結婚したくないという。しかし、フェルデルンを見る彼女の顔には、身震いと戦慄が走ったと描写されているところからも、彼を愛していないことははっきりしている。それなのに、何故彼女は断れないのか。フェルデルンには、彼女の気持ちがさっぱりわからないので待ち続けていたが、とうとうファウスティーネに仲介を求めた。

クニグンデという人物は、これまたファウスティーネとは対照的な性格として描かれる。ファウスティーネが太陽とたとえられるなら、クニグンデは月と比喩される。月は自らでは輝けない、太陽の光があってこそ輝ける他動的主体の象徴でもある。しかし、クニグンデはファウスティーネには初対面から心を許し、それまで硬く閉ざしていた心を開いて打ち明ける。フェルデルンとの結婚を拒絶すると、家の中に彼女の居場所がなくなると言う。両親は長女のクニグンデが早く結婚しないと、妹たちの結婚の大いなる障害になると考えていて、暗に強要している。それがわかるので、自

分には選択の余地がないと言う。彼女の状況は、いわば夜の暗闇にいるようなものであった。しかし、愛していない男性と結婚する意志はないとはっきり表明する点で、ファウスティーネには、クニグンデは明確な自己意識を持った女性に見えた。そこで、彼女のためにしてあげられることは、彼女が家から独立して暮らせるように、避難場所を見つけてあげることだと思った。

ファウスティーネのしようとしていることは、フェルデルンの意に反して、仲介でなく別れである。冷静なフェルデルンは、事情を察して、それがクニグンデの望みならと潔く承認する。小説は、クニグンデの生きる道を、一人の女性の自立の道へと展開させるのかと思いきや、そうではなかった。クニグンデはやはり月だった。小説の最後の方で、ファウスティーネが彼女の避難先に立ち寄ったとき、クニグンデは未婚のままでいくことを恐れて、村の司祭と結婚したことを知る。そのとき、ファウスティーネは、人物としてはフェルデルンの方が、彼女より優れていたことを後から知った。

さて、小説はいよいよ本筋のファウスティーネとマリオ・メンゲンの出会いへと展開する。ファウスティーネの恋人アンドラウは、母の死の知らせを受け、故郷のエルザスへ向かった。その間、独りになったファウスティーネは、絵を描いたり、本を読んだりともっぱら家の中で生活を送っていた。しかし、アンドラウの故郷での滞在は思いのほか長引いた。時間がたつにつれ、彼女は孤独な生活に耐えられなくなった。そこで、知人のサロンへ出かけてみることにした。彼女は、元来サロン嫌いだった。社交上の表面的な会話や、あまり意味のないつきあいで、人々の間のバランスを取りながら交際していくことを、窮屈で不愉快と思っている。それよりも、信頼できる者と心置きなく話し合うことを好み、その相手としてアンドラウだけで十分であった。

知人のサロンは、20人程度の集いで、フェルデルンやマリオ・メンゲンも招待されていた。彼女はかねてから、マリオ・メンゲンが彼女と知り合

いになりたがっていることを、フェルデルンから聞いていたので、マリオを自分の家に招くことにした。二人は初対面から会話が弾み、彼女はマリオを感じがよいと思った。それから、マリオは毎日のように訪れるようになった。やがて、二人の間に恋の炎が燃え上がることになっていく。アンドラウのいない間に、マリオが彼女の心の隙間に飛び込んできたわけだが、ファウスティーネは、マリオと付き合う権利があると思っていたし、危険には至らないと高を括っていた。彼女の行為は軽率だったといえるが、彼女は人生のどんな出会いでも受け入れたい、と思う熱い心の持ち主なのである。マリオはというと、彼女とアンドラウとの関係を噂では耳にしていたが、今現在いない人物なので最初は気にもかけていなかった。しかし、彼女への気持ちが徐々に高まっていくにつれ、アンドラウの存在が気になり始めた。

やがて彼女は自分の家に他の人々をも招き、社交生活を活発に始めていった。その中には、彼女を慕って田舎から出てきたクレメンスも加わった。クレメンスは、一目で彼女がマリオに特別の気持ちがあることを見抜き、マリオへの敵対心を露にした。ファウスティーネの方では、次第にクレメンスの無教養を疎ましく思うようになった。彼の自分への思慕の気持ちも重荷に感じた。しかし、彼を追い払う権利はないので、時には導くような気持ちで優しくもしていた。

さて、先ほどのクニグンデの避難先のことだが、マリオの両親の家が候補に挙がった。マリオの妹が近々結婚して家を出るので、両親は彼女に代わる話し相手を探しているというのである。マリオはクニグンデが丁度よいのではないかと、両親に手紙を書いた。両親も喜び、話はとんとん拍子で決まった。マリオは早速クニグンデを連れて行くことになった。ファウスティーネとマリオの数日間のこの短い別離の時間が、二人の恋心に決定的に火をつけることになる。一方、マリオのいない間、彼女がクレメンスに少し優しくなったことが、彼に誤解を与えることになる。

マリオが戻ったとき、二人の恋心は一気に燃え上がる。マリオは、彼女

の過去を知りたいと言う。彼女は、彼女の不幸な結婚から離婚、そしてアンドラウとの出会いへと、包み隠さずに全てを語る。それは、作者自身の体験と重なり合うようである。ファウスティーネの夫は、貴族階級に属する人物で、はじめて会ったときには悪い感じを受けなかった。だからすぐに彼から求婚されたときも、結婚を拒む理由がなかったので、世間のしきたりに従おうと思った。情熱を抱いたわけでもなく、強制されたわけでもなかった。しかし、結婚して初めて彼の実像を知った。彼は、彼から金銭をせびるような悪い友達に囲まれており、生活は荒れていた。彼はおだてに乗りやすい弱い性格なので、彼女が彼をよい方向に変えられるのではないかと努力してみたが、変えることはできなかった。むしろ、悪くなっていく一方だった。彼女は次第に、自分を主人の命令に従うだけの奴隷女のように思えて、惨めになっていった。その上、一緒に暮らしていた夫の母や姉妹も、彼女に無理解どころか敵対的で、彼女は家の中で孤立していった。そんなときアンドラウと知り合い、彼を愛するようになった。ある日、アンドラウといるところを夫に見つかり、アンドラウは夫からピストルで撃たれ、深い傷を負った。そのときから、彼女は夫を捨て、アンドラウの側を片時も離れなかった。尊敬する男性とともにいる幸せ、愛と芸術に満ちた生活、それだけで十分だった。世間はもうどうでもよいと思った。夫はそれからすぐに亡くなり、彼女は名実ともに自由の身になった。しかし、結婚に対する拒否感が強く、アンドラウとでも再婚する気にはなれなかった。しかし、結婚という形で自らを束縛しなかったことを、今、最大の愚考だったと思う、とマリオに言う。

彼女の気持ちは揺らいでいる。アンドラウへの愛と尊敬の念は変わらないが、彼とはもう半年も離れ離れになっている。マリオは一部始終を聞いた後で、彼女の自分への愛を確信し、求婚する。彼女はアンドラウに対して、不実になると悩み抜く。しかし、マリオの情熱は激しく、彼女に考える暇を与えようとしない。結局、彼女があれほど拒否してきた再婚なのに、彼の求婚を承諾してしまう。マリオは、彼女の決心が変わらないうちにと

ばかりに、アンドラウへ別れの手紙をすぐ書くようにと迫る。そして、彼女が混乱状態のまま手紙を書き終えると、それを彼みずからが投函した。その翌日、マリオは妹の結婚式のために故郷へ旅立った。

一方、ファウスティーネのもとに帰る途上で、その手紙を受け取ったアンドラウは、突然の出来事に錯乱状態になった。まるで死人のようになって、ただひたすら馬車を走り回し、見知らぬ町々を疾駆して、立ち寄った町の大聖堂に入り、祈りを捧げるのであった。そして、ファウスティーネの弱さを憤怒した。彼女は彼の生活を破滅させたが、彼女自身の生活も破滅させたと、アンドラウは思った。ようやく落ち着いた後、彼女に手紙を書いた。彼女を非難しない。自分のことは忘れて幸せになりなさいと。

アンドラウから手紙を受け取ったファウスティーネも、徐々に落ち着きを取り戻した。しかし、以前ほど自由でも、軽やかでも、明るくもない自分に気づいた。ところで、クレメンスは、アンドラウが彼女にとって特別の人であることには、どうとも思っていなかったが、マリオには我慢ができなかった。彼の恋心が無視され続けていることに絶望し、彼女の目の前で突然ピストル自殺を遂げた。この思いもかけない出来事に、ファウスティーネは失神し倒れた。ちょうどその場にマリオが帰ってきて、倒れている彼女を連れ去った。

ファウスティーネが主人公として展開される小説の進行はここで止まる。その後の彼女の運命の顛末は、今度はマリオによって語られる、という二重の視点を持つ物語構造になっている。小説の雰囲気も一変して重苦しくなる。ベニスを訪れたドイツ人夫妻の旅人が、広場で美しい少年を連れた男と出会う。この男がマリオであるが、マリオは魂を抜き取られたように変わり果てていた。旅人は、ドレスデンでのファウスティーネのスキャンダルを知っていたので、その後の彼女について聞かせてくれと頼む。マリオは、この見知らぬ旅人に憑かれたように語り始める。

「私たちは正式に結婚した。結婚後すぐに、私の代理公使としての赴任先のフィレンツェで、4年間暮らした。私は彼女を熱烈に愛した。1年後に

息子が生まれた。ファウスティーネは画家としても認められるようにもなっていた。私たちは中東へ旅したが、その旅が幸せの頂点だった。旅からフィレンツェへ戻ると、彼女は変わった。メランコリーが漂い始めていた。彼女はその後、旅をしたがらなかった。どこへいっても同じ、人間はみな同じ、外面的生活には終りがあるが、しかし内面的生活は求め続けられるかもしれない。例えば、修道院の中でと言いはじめた。彼女は、もう絵を描かなくなり、詩作もしなくなった。私をもう愛していないのかと問うと、愛している。あなた以外は何も愛していないと答えた。でも、この世のすべては繰り返しに過ぎないと言う。

彼女は、イタリアのどこかでアンドラウと出会うのではないかと、いつも恐れていた。そして、彼女一人のとき、恐れていたことが起こった。ピサで、医者に付き添われていた病気のアンドラウに出会ったのである。彼女はすぐに彼と気づき、苦痛の声をあげて叫ぶと、彼は拒絶的な態度をとって気絶して倒れた。彼が気絶から立ち直ったとき、ファウスティーネが二人だけで呼び合っていた愛称でそっと呼びかけると、彼も彼女の愛称で応えてくれたが、すぐに息を引き取った。

そのときから、彼女は、アンドラウの心のみならず命も奪ってしまったと、自責の念が抑えられなくなっていった。修道院に入って静かな暮らしがしたい。神の中に平安と休息があると思うと、彼女の決心は固かった。私は彼女と結ばれたときから、不思議な運命を覚悟しなければならなかったのだと、自分に言い聞かせた。このような女性との付き合いでは、至福を味わうが、傷も負わないわけにはいかないのだろうと、自分を納得させた。私は絶望的な気持ちのまま、何も言わずに彼女を修道院へ送った。だが、彼女は着衣式後わずか1年半で亡くなってしまった。短い病気でとだけ聞いたが、長い心労と苦々しい失望感と傷をなめるような後悔で亡くなったと、確信している。

それは5ヶ月前のことだが、それ以来私にとって、太陽は冷たく、夜は長く、目はかすみ、動作は重く、思考ものろい。人生の喜びがなくなって

しまった。今、私の唯一の希望は息子である。彼女と同じ目と声と熱情を持っている彼女の遺産なのである。」

マリオは、このように一方的に語り終えると立ち去って行った。

2　ファウスティーネという名前の由来

ファウスティーネという名前には、特別の意味が込められている。彼女にこの名前がついた由縁は、彼女の父がゲーテの『ファウスト』を愛読しており、男の子が生まれたらファウスト、女の子だったらファウスティーネとつけることを決めていたからである。彼女自身もこの名前を十分に意識しており、「自分の運命を、ファウストのように絶えず前進し続けることに、そして充足を追い求め続けることに見出そうと思った。しかし、ファウスト第二部は、私にそうすることを不可能にした。私は私たち各人が自分自身のファウスト第二部を書くのがよいと思う。ゲーテ的なものは余りにも個性的すぎるので」[14] という。

ゲーテの第一部は、よく知られているように、学者ファウストは悪魔メフィストとの契約で、現世において彼の望むすべてが叶えられることになる。こうして、ファウストは人間に許されうる最大限の豊かで楽しい生活を経験する。第一部の中心をなすのは、純潔無垢な少女グレートヒェンとの恋である。少女から身も心も捧げられる愛を得て、ファウストはこの世の最大限の幸福を経験する。しかし、グレートヒェンは彼との間に得た嬰児を誤って死に至らせたことで、嬰児殺しの罪で牢獄に入れられ、苦悩と屈辱の中で死んでいく。ファウストは、グレートヒェンを救えなかったことに、自分の罪の深さを知る。しかし、ファウストの止まることを知らない前進する意欲は、恋という小世界に安住できずに、第二部の大世界へと続く。グレートヒェンの愛は、結局ファウストという巨人の成長のために、いわば養分として吸い取られ、犠牲にされたということである。

ファウスティーネも、自分の名に恥じないようにこの世のあらゆる可能性を求め、前進することを自分に課した。男性に許されていることが、女

性にも許されるはずだと考える。女ファウストを目指そうとした。彼女が女ファウストであるのか否かについては、ファウスト論からきちんと議論しなければならないので今回は省略するが、結論だけ言うなら否である。

3　アンドラウの愛とマリオ・メンゲンの愛

アンドラウとの関係について、ファウスティーネは次のように言っている。離婚した夫と比較して、「アンドラウとは全く違った関係だった。私は絶えず高められ、決して引き摺り下ろされることはなかった。私は絶えず前進し、発展し続けるのを感じた。止まることも、後退することも、沈むことも感じなかった。私は幸せだった。この幸せによって私に能力が与えられていると感じ、そしてこのやりかたで幸せをつかまえておけると感じた。そしてこの幸せとこのやりかたが、私を完全に自律させてくれたと同時に女としての領域に入れてくれた。女としての発展と充足は愛の中にのみある。」[15] ファウスティーネは、アンドラウとの愛の中で自律して仕事ができると同時に、自己発展をし続けていくことができるとの確証を得る。

アンドラウの存在は、ファウスティーネにとって恋人、師、友、父を兼ねた存在であるが、夫ではない。彼女は屈辱的な結婚生活の体験から、女性に不利な古い結婚制度に反発し、主人は不要と思っている。「彼女の精神は、いつもアンドラウのもとで養分と刺激を見出した。彼の魂は、彼女にとって完璧そのものだった。稀なことだが、彼女の意志が、彼の意志によって損ねられて、彼の優勢が彼女を圧迫することもあった。しかし、彼女はじっくり考えてから、あなたの方が正しいといつも言った。・・・彼女は気分の赴くままに、情熱と直感で行動した。原則は持っていなかった。」[16] アンドラウは彼女の自由意志を押さえつけることはしないので、アンドラウの意見が正しいと思ったなら、彼女は素直に従うことができた。アンドラウが、彼女を同等の存在として受け入れていることを、彼女は感じている。アンドラウは、彼女の主張する、男性は同性と付き合うときと

同じように女性とも付き合うべきだ、という彼女の要求にかなう人物だった。このような関係は、彼女に自分自身に目を向ける余裕と自由を与えている。しかし他方、自由の基礎の上に築かれる愛では、自己滅却してもよいと思わせられるような愛の法悦の絶頂感は得られない。ファウスティーネはアンドラウの冷静さを嘆くことがあった。アンドラウの愛は熱烈ではないが、その代わりに彼は彼女と同じ感性を持ち、彼女の本質を理解している存在である。「君は言葉や絵や表現によって、君の充実、熱情そして華麗さを発揮しなければいけない。私は君の持っている富を持ち合わせていないのだから、黙って崇拝して君を見上げていなければならないのだ。君はそれを関心と愛の欠如と云うのか」[17] と彼は言う。

「ファウスティーネは、人生のどんなときにも、幸福の美酒を求め、飲み干すような、炎を渇望する魂の持ち主だった。酔いもせず、よろめかず、思い上がらずに。自分はそれにふさわしいという意識を持ち、そしてそれ故に、死すべき者のようには陶酔せず、天上の者のように至福を味わって！しかし、それが人間に提供されるのは、大きな祝祭日だけで、普通の日にはない。そこで、ファウスティーネは、慰めと鎮静をその代わりに、いつもアンドラウのもとに見出していた。」[18] 彼女の激しく燃えるような魂は、彼のもとで鎮められ、慰められ、彼女は自分自身を統一体として受け入れることができた。他者から丸ごと承認されているという自信故に、彼女は他人の目を気にすることなく、右も左も見ず、迷わずに我が道を歩いていた。ファウスティーネとアンドラウは、極めて自然な状態で共に生きていたのである。

アンドラウとのこの愛を壊したのは、彼女のマリオ・メンゲンへの情熱だった。マリオの激しい情熱に、ファウスティーネは自分を制御できなくなって、感情の奴隷になり、彼の意志に屈する。マリオは、彼女にアンドラウと別れて、自分と結婚して欲しいと迫る。「私が自分の人生を捧げる女性が、私の名を名乗ることを拒むのを許せると思うか。その女性が、法的に私の保護の下にいないなら、どのようにして彼女を守ったらよいの

か。多くの男性があなたに敬意を払い、そのうちの何人かはあなたを愛するかもしれない。だが、夫こそがあなたを守り、尊敬することができるのだ」[19] と、彼は結婚という形にこだわる。マリオの愛と結婚に対する考えは、彼女とまったく異なっていた。「彼女は、あらゆる社会的制約の外にある愛によって、自由を感じようとしていた。しかし、制約の中にのみ自由は存在する。制約のないところには、恣意と混乱がある」[20] というのが彼の考えである。彼女はそれを認めてしまう。このとき、彼女は自己否定をしてしまったのである。

マリオは、「彼女が順応することを望んだ。私にではなく、社会公認の揺るぎのない法に。彼女は徐々に適応していくうちに、彼女の内奥の本質を徐々に抑制できるだろう」[21] と思っていた。マリオは、かくして彼女を結婚という枠に入れたとき、彼女を手懐けることに成功したかに見えた。だが同時に、彼女を価値あらしめていたものを壊してしまったことに気づかなかった。ファウスティーネは、最初の結婚と違って抑圧された関係でなく、相互の尊敬と愛情によって結ばれた結婚であることでは納得している。だが、愛している男との結婚でも自己決定を軽視して、男に服従したという意識がある。それ故に、彼女の情熱的な愛は、おのれの自己犠牲を理想化しようとする。そこで、二人が結ばれた初めの頃の密度の濃い愛を維持することに必死で努力する。だが、それはそもそも不可能に近いことであり、次第に、情熱そのものを努力から生み出すという本末転倒になっていく。

彼女は、二つの魂が一つになる自己滅却の法悦の瞬間が永遠に続くことを求め、そしてそのあとには意気消沈と憂鬱に襲われた。「あなたの視線が以前より冷たく、会話が活発でなく、口づけが冷静になっていると感じるとき、あなたも同じことを感じているのだと思う。そうすると、私はなんとも言えず悲しくなる。」[22] 彼女は愛し続けるために全身の力を振り絞る。マゾヒスティックと思えるほどに。しかし、愛の力が徐々に衰えていくのを感じるとき、彼女からあらゆる推進力が喪失していった。彼女の関

心が、あまりにも対象に固定されているために、自分自身に関心が向かず自由を失ってしまっているのである。

彼女は外部のすべてのことに、絵を描くことすらも無関心になっていった。しかし、なおも自分の内面を必死に探り続ける。それが尽きたとき、外に向かう。神のもとにいる人たちには愛の力が与えられているのではないかと、彼岸の世界を求める。「私たちは、埋蔵物を求めて私の心を掘り続けたので、もう金の鉱脈を掘りつくしてしまった。悲惨な結果になる前に、私は坑道を埋めようと思う。そしてその上に花を植えようと思う。・・神に仕えるために修道院へ入りたいと思っている。」[23)]

マリオには、彼女が全然理解できなかった。愛する夫とかわいい子供がいて、画家としての名声も得ている。それなのに何故、彼女はメランコリーに襲われるのかと。マリオの愛は、女に服従を求めるが、男はその代償として夫として誠実を尽くす、という市民道徳を基盤としている。ファウスティーネには、それは自己犠牲が強制されることを意味した。自己犠牲の愛は自分自身を消耗させていく。やがて、彼女の強制された自己犠牲は、その報復として自分自身に向かい彼女を蝕んでいく。そして、最後に救済策として僧院が残る。アンドラウとの関係では、彼女に大きな自由を与えていたのだが、マリオ・メンゲンとの関係はファウスティーネから自由を奪ってしまったのである。しかし、マリオへの愛に対する彼女の自分自身への要求には、矛盾しているところがある。彼女の中には伝統的形式に順応してでも愛されたいという要求と、そして自分自身の固有の人生の意味を求める要求とが並存しているのである。作者の中には、無意識な願望として理想的な大きな愛への憧れがあるのだ。

4 『伯爵夫人ファウスティーネ』は女性解放の小説か

ハーン＝ハーンの小説は同時代の女性解放の小説とは異なる。この傾向の同時代の女性作家たちは、女性の就業要求と政治への参加をテーマとしている。しかし、彼女は貴族階級出身のせいか、政治的参加の問題には関

心がない。彼女の関心は私的な領域に限られている。この小説も、自分の人生を自分の思うままに築き上げることを求めた、精神的な意味での自己中心的な女と、彼女を愛して破滅した男たちの物語と捉えられるかもしれない。しかし、彼女の小説は、女性が自己決定するとき、無意識的にそれを阻む心情的な要素が女性自身の中にあり、その葛藤を描いているのであって、何が女性の自立の障害になるのかの問題を明らかにしてくれるのである。美学的見地からの文学批評はさておいて、この私的ではあるが普遍的になり得るテーマがあるからこそ、女性解放運動の中での一時的な成功後も、この作品だけは生き残ったのであろう[24)]。

この小説の最後は、一部始終を聞いたドイツ人旅行者夫妻の言葉で締めくくられる。「ファウスティーネのような女性は、私たち女性の復讐の天使ではないか。この世の最も優れた男たちが、このような女性に魅入られて、心には心を、生には生をと全存在を彼女に喜んで与えようとする。彼らはこのように光り輝く人は、この世のものでないと考えている。このような魂の吸血鬼は焼いてしまうがいい。・・・男たちよ、ファウスティーネのような女性には気を付けなさい」[25)] と、男を破滅に導く吸血鬼のような女という男の観点で終わるが、無論この視点は作者と同等のものではない。何故なら、物語の最終章はマリオの視点で語られるファウスティーネであって、ファウスティーネ自身は関与していないからである。それとも作者は、ファウスティーネ像は読者が自由に解釈するがよいと言っているのであろうか。

ところで、この小説は大筋ではハーン＝ハーンの体験そのものである。二人の男性には、それぞれモデルがいて、アンドラウはビュストラム男爵、マリオ・メンゲンはハインリヒ・シモンといわれている[26)]。シモンは市民階層で民主主義の信奉者、ユダヤ人で上級公務員、かつまたハーン＝ハーンの文学上のライバル、ファニー・レーヴァルトのいとこでもある。シモンは、レーヴァルトにとって憧れの人だったが、彼の方はレーヴァルトには友情しか感じなかったようである。一方、ハーン＝ハーンは、ビュスト

ラムとシモンとの愛に心が引き裂かれ、激しい葛藤に陥ったことが、19世紀に書かれた文学史から知られる[26)]。しかし、シモンへの情熱は最終的には結婚でなく、諦めに至った。そして、本の扉裏には見守り続けたビュストラムへ感謝の言葉を捧げている。

終章

ハーン＝ハーンは、1849年44才でビュストラムと死別した。翌50年カトリックに改宗、52年にマインツにある「アンジェ良き羊飼い（イエス・キリスト）修道会」（Der Orden vom Guten Hilten zu Angers）の修練女となるも、修道女としては受け入れられなかった。しかし、54年には彼女の財政的援助で、同修道会の修道院が新設され、彼女は後半生をこの修道院で送った。改宗後は、カトリックへの転向小説や宗教的な詩、そして回想録を書き、1880年74才で亡くなった。

なお最後に、復刻されたこの小説が出版されたとき私はすぐに買い求めたが、そのときは通読しただけだった。そのうちいずれ翻訳をするか、或いは、論文を書きたいと思っていたが、いつの間にか年月がたってしまった。第二波フェミニズムも去り、この本は今では絶版になっている。私としては、長年の懸案だったこの小説に関して、今回論文としてまとめることができ安堵している。

注

1）Gero von Wilpert, *Deutsches Dichterlexikon,* 1976, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart.
2）矢野久、アンゼルム・ファウスト編、『ドイツ社会史』、2001、有斐閣、p.28.
3）末川清、「ウィーン体制下の政治と経済」、成瀬治・山田欣吾・木村靖二編、『ドイツ史2』、2001、山川出版社、第6章、p.233.
4）矢野、前掲書、p.160.
5）ウーテ・フレーフェルト（若尾・原田・姫岡・山本・坪郷訳）、『ドイツ女性の社会史』、1990、晃洋書房、p.9.
6）同上、p.32.
7）Renate Möhrmann, *Die andere Frau: Emanzipationsansätze deutscher*

Schriftstellerinnen im Vorfeld der Achtundvierziger-Revolution, 1977, Metzler, Stuttgart.

8）Ibid., p.85.
9）Ibid., p.92.
10）Ibid., p.95.
11）Ibid., p.96.
12）Ida Hahn-Hahn, *Gräfin Faustine*, 1986, Bouvier, Bonn.
13）Ibid., pp.49, 50.
14）Ibid., p.175.
15）Ibid., p.196.
16）Ibid., p.17.
17）Ibid., p.29.
18）Ibid., p.30.
19）Ibid., p.201.
20）Ibid., p.220.
21）Ibid., p.222.
22）Ibid., p.225.
23）Ibid., p.235.
24）Annemarie Taeger, Nachwort in: *Gräfin Faustine*, p.264.
25）Hahn-Hahn, p.244.
26）Möhrmann, p.99.